

第6回あおもり立志挑戦塾

平成 25 年 11 月 23 日(土)~24 日(日) 星と森のロマンピア(弘前市)

□天明塾長挨拶 「己を知る～家系図は世界でたった一つ 自分だけの教科書～」

私が立志挑戦塾で話してきたのは、人間力を高めていくことが一番大事だということで、今日は人間力のベースになる人間性をどうやって培っていかについて、家系図について話をし、家系図から自分をしっかり知る、己を知る、ここにつなげていきたいと思えます。

今、自分の家系云々なんていうことは話題に無くなってきています。家制度が変わって、家という感覚は薄いと思います。でも、遺伝子的に見ると間違いなく自分は100%両親からもらったものです。これだけは間違いないので、家系図は世界でたった1つ、自分だけの教科書なんだ。こんな話を40年、私は先生から言われ続けてきましたが、自分が今あるのは自分の家系を知ることからスタートしている。それは間違いなくことです。

1番目、人間力と人間性。私は、人間力は人間性にリーダーシップがついてくると人間力って感じがしているのね。ベースになるのは人間性。1番目、人間性はどのようやって培われてくるのさ。両親への恩の自覚から始まる。生まれて一番先にお世話になるのはお父さん、お母さん。その恩の自覚。生んでいただいたっていう自覚が人間性の根元です。私みたいな人にも、こんなにしてもらってもったいない、ありがたいという感謝の心が深まってくると、少しでも恩返しをしたいという気持ちに普通はなるよね。報恩の気持ちが、人に尽くそう、社会に貢献しようという気持ちになっていく。感謝が広がればお返し心が広がって、それで社会的貢献、地域にお役立ちという気持ちにつながっていく。

2番目、サムシンググレートが応援してくれる条件。(1)自分の全ては遺伝子暗号に込められている。そうだよ、よその混ざりはないんだもん。(2)サムシンググレートはずっと上の親だから、志を持って何かをやろうとすると応援しないはずはないんだけど。(3)配線がつながっていることが条件なんだよ。それは両親や先祖に関心を持つ、理解する。無関心でいると配線が繋がらない。配線が繋がるといのは、関心を持つ、理解をする。私は親に全然世話になってないという人もいるわけ、たまに。こういう人が何かやってもうまいかない。本当にそうなんだ。人間として基本的信頼感が欠落している人というの、なかなか人間性が上がっていかない。

2ページにいきます。これ、私の家系図なのね。子どもが4人いるんだけど、長男は1845gで未熟児です。2番目、流産です。3番目、4番目、5番目、今は結婚して孫もできたりしているんですが、問題は長男が未熟児、2番目の子が流産。理由は分かっていた。それは私と父

の確執なんです。3日に1度、家内はベソをかいている。普通は嫁と母親が嫁姑になるんだけど、母親は長兄の嫁と既に嫁姑関係があって、長兄は家を出ちゃったんです。そのために私ら夫婦は両親と同居することになったんだけど、そういう学習を私の母はしていたから、母と妻はそこそこうまくいった。問題は私の父。私の父はとにかく言葉にとげがあるんです。なぜか分からない。それで始めたのが家系分析。そして分かった。代々、嫁姑、同じことが繰り返されているんだ。このままだらば、今度は私らの子どもが結婚して、今度またその子どもの嫁と妻は繰り返す。何とかしなくちゃいけない。調べて、一杯あるんだけど時間もないので2つだけ。

1つは、ちょっと怖い話なんだけど、先祖が夫婦で養子に入って夫婦で出ちゃうわけなんだけど、その時にこの養家先、栗餅屋が「お前達が出て行ってしまったら、私らは絶家してしまう。お願いだから留まってくれないか。」というのを、「嫌だ」と出て行っちゃう。この時に、この栗餅屋に「ここまで頼んでも出て行ってしまうのか。勝手にしろ。その代わり、お前達が死ぬときには馬乗りになって首を絞め殺してやる」と捨て台詞を言われて出て行った。そこから家系を調べてみると、首つりとか牛から落っこちて苦しい、苦しいと言って首を押さえて亡くなったとかね。いや、びっくりします。それでお寺さんに頼んできちっとお祀りをしてもらったのが1つね。

もう1つは、妻と父親との関係の中で、父親は子どもの頃、百姓奉公に取られたことが分かっていた。そのトラウマがあるわけだ。だから人は信じられない。甘いことを言っちゃダメだ。贅沢しちゃダメだ。それで陰險、強情、ケチ、とげのある言葉で人を傷つける。そういう背景で妻が父親を見ていると、「お父さんは私を嫌ってそう言っていたんじゃないんだ。」って、だんだん分かってきた。それからは手の平を返したように、父は妻をかわいがってくれる。それから生まれた長女、次男、次女はそこそこ、孫も今は4人までになりました。

私はそのことをこうやって冊子にまとめました。主役は両親です。昔の家の間取りや年表を作ってみたり。その中で、おじいちゃん、おばあちゃん、お父さん、お母さんは苦労したんだと理解してあげる。そして反面教師としていく。このことが私をここまでにしてきてくれている。皆さんあまり家系とか先祖とか考えたことはないと思うんです。でも、今、やらなくちゃいけないというのは、お父さん、お母さんが若いうちに聞いておくと、おじいちゃん、おばあちゃん、ひいおじいちゃん、ひい

おばあちゃんのことを情報として取れるんです。だから、若いうちにやった方が絶対いいです。自分を知る上で。

5番目。(1)「家系図は世界でたった一つの自分だけの教科書」、私の先生なんです、薄衣佐吉という。この人は公認会計士で、八戸大学を創る時に参加した先生。(2)両親に聞く、除籍謄本、過去帳、墓碑を調べる。郷里に足を運ぶ、親戚を訪ねる、菩提寺に行く。(3)家系図にまとめる。(4)両親・祖父母、曾祖父母の喜び、どんな喜びがあったんだろう、どんな辛いことがあったんだろう。(5)家系分析をすると、生かされている自分に気づく。自分はこれをするために生まれてきて大きくなったんだ。自分の使命に気づく。そしてサムシンググレートにつながる。家系を調べて見ると、いいことばかりじゃありません、いいこと、徳と良くないこと、辛かったこと、不徳、必ず両方あります。両方、真正面から受け止める。

□講話

講師 丸 幸弘氏 ((株)リバネス代表取締役CEO)

題名 「志を持つということ」

皆さん、こんにちは。「志を持つということ」という難しいタイトルにしましたけれども、キーワードは教育と最先端のテクノロジーです。予備校の生物学の講義で、先生が「こう書いてあるけど、まだ分かってないことがいっぱいある。」と言いました。生き物が1つの卵から何でちゃんとした体で生まれてくるのか分からないんですよ。これで僕は生命科学というものに非常に興味を持ちました。大学時代も勉強は嫌いだったんですけど、生物学だけすごく好きになって、ここから学問の道へ行きました。ノーベル賞学者に教わったんですが、学問に決まりはない。自分の興味に従って進むだけだ。勉強というのは、強いる。強制なんです。学問は興味がある対象、問いを自分で立てる。問いに対して学ぶのは、中小企業の経営者でもサラリーマンでも政治家でも一緒。僕はこのノーベル賞の科学者の方に、「自分の問いを作ることが人生そのものだから、いいんだよ、人は。」と言われた時に変わりました。自分の疑問を突き詰めようということで、研究者になろうと火が付いていったわけです。

でも、そこから、何で会社を創ったのか？起業家になっちゃったって、皆言うんですよ。僕は今でも研究者です。世の中を変えるためにはどうするのかという研究をしています。僕はどうしたら一番早く自分の考えている研究ができるのかを考えました。これも問いに対して学びました。研究室に必要なものは何か。一つひとつ考えて、これは教授にならなくても研究ができるなど。僕は教授になりたかったわけじゃない、研究をやりたいかった。12人の仲間が集まりました。立ち上げた後は回さなきゃいけないんですよ、仕事をね。だから、ITベンチャーにインターンシップで潜り込

(1)両親に感謝する、報告する、手紙を書く、喜んでいただく。(2)親祖先のいいところを讃える、感謝する、継承する努力をする。(3)親祖先の長所を知る(4)親祖先の短所、良くないことがあれば原因を知る、慰霊をする。慰霊をするって法事をするとかお墓参りをして、自分が繰り返さない努力をする。(5)健全で規則正しい生活、OAAでしたね。お掃除、挨拶、ありがとう。

どうか、お掃除、挨拶、ありがとうを続けていくことは、やっぱり最終的には自分の使命の全うにつながっていきます。今日は家系を通して自分の命につながる。そうするとサムシンググレートが応援してくれる。自分の本当の使命に気づく。こんなことを勉強させていただきました。

ぜひ参考にさせていただければと思います。ありがとうございます。

んで、出来たばかりの会社がどうやって運営されているかを勉強しに行ったんです。社長に「僕、給料は0でいいです。代わりに社長の1時間を、毎月1回ください。それが僕の給料です。焼き肉をおごってください。」。僕がほしかったのは経験です。月に1回クエスチョンを1時間して、焼き肉をおごってもらおう。何かを変えたいから僕は学びたいと。そうしているうちに金の流れが悪くなったり、実は経営者トップが2人いて、喧嘩をし始めたんですね。これが終わった後、メーリングリストで「バイオベンチャーに参加したい学生募集」というのを見て、すぐ飛びつきました。投資家から2,000万いただいてやったんですが、3カ月で潰れました。僕らにしかできない仕事だから口なんか出さないだろうと踏んでいたんですけども、うまくいなくなってきたら、投資家からお呼び出しが掛かりまして、「学生でネットワークがあるんだから、人材派遣をやれ」と言われて喧嘩したんですね。ここからは借金地獄で、投資家に口を出されるのが分かったから、自腹でお金を借りて会社を創りました。僕が考えていたのは最先端の研究をする研究所。でも、一般の方に買ってもらわないとビジネスというのは成り立たない。だから、自分達がやっている研究を分かりやすく伝えるインフラを作らない限り、最先端の研究って売れないんですよ。なので、研究を理解してもらえないような事業、つまり教育事業をやっていかないと仕事にならないって気づいて、僕らは自分達だけで最先端の科学教育というのを仕事にしてみようぜと。これは世界初なんですよ。小中高で最先端の科学教育をやったって売れないってマーケティング担当の人は言うんですよ。ニーズはないと。僕も知っていました。多

分ニーズはない。でも、僕にはニーズがある。伝えなければいけない。僕は研究を通じて世の中を良くしたい。だからニーズを作ろうと思ったんですよ。ニーズがあってマーケットがあるから仕事をするのではなくて、こういう世の中になってほしいという思いで自分達がやろうと。それでリバネスという会社を創って、同時に「どんどん研究のベンチャーをつくらう」と。こんな感じで、僕はたくさん会社を起こしてきました。

リバネスは、理工系の学生だけでつくった奇跡の会社です。世界を探してもここしかないです。ITはやりません。ITベンチャーはたくさんあったから。もう新しくないから。シリコンバレーに勝てないから。勝てることをやろうと決めて、日本で初めての科学教育から始まった会社です。僕らのコンセプトは、当初から今も変わっていません。どんどん研究を世の中に出したい。だけど、一般の方はそれを理解しなければ買いません。この知識、認知度の格差を埋めていけば、僕らが作った技術が早くお客様に届いてプラスに動いていく。それをリバネスは助けるんだと僕は考えました。今まで研究者は研究だけをやれと育てられました。でも、違うんです。研究者が研究を伝えるというビジネスをちゃんとやらなければいけないステージになったんです。なぜなら、あまりにも研究の開発速度が上がってきたからです。我々は理念をこうしました。「科学技術の発展と地球貢献を実現する」科学技術をしっかりと地球のために使いましょう。次世代のために使いましょう。僕らの専門性を活かして一般の方々を巻き込んでよい地球を作る。これが僕らの理念です。

我々は、知を社会に還元できる人材をひたすら育てるというので、科学を伝えるスキルの育成トレーニングを、大学院生を集めてやっています。そこで、どうやったら分かりやすくサイエンスが伝えられるかのノウハウを作ります。小中高に出前授業をするんですね。子ども達を成長させながら大学院生が成長しています。小学生に分かりやすく専門用語を伝えられたら完璧なんです、コミュニケーションとしては。企業の中で研究をやっていたって、広報の人に研究を分かりやすく伝えて、広報の人がちゃんと新聞に出すという、大企業の中でもハブとなるような人材になるんですね。ここが今まで足りなかった。この人材育成モデルが我々のコアコンピタンスになって、このモデルごと、今、マレーシアに買い取られています。教育活動からどんどん広がって、いろんな事業をやっています。僕らは、自分の知恵をどんどん売っています。この教育応援プロジェクト、最初は大学院生モデルでやっていたんですよ。そうしたら、企業の人事から連絡が来て、うちの新入社員の研修にしてくれと。今は100以上の企業で導入されています。学校の現場は決して子ども達の育成の場所じゃなくて、実は社会人の育成の場所が変わっていくんだと。これから学校が地域におけるハブ

になる。学校というコミュニティがこれから変わっていく時代なんだ。会社は何のためにあるか、次の世代のためにあります。我々は次の世代のために働いている。そして、数学とサイエンスは世界の共通言語だから僕らは世界展開ができる。日本発のすばらしい完全循環型のエデュケーションプログラムを世界に売っていきます。日本の一番強いところは教育です。皆さんの手元の、iPhone、スマホ、これは端末じゃないですよ、世界なんですね。この窓から全部の世界が見えているんです。こういう時代に、僕らの子どもって今と同じ教育を受けていて、果たしてやっつけられるんですか。映像を一つ見てください。〈動画再生〉



これはアメリカの学校の先生向けの研修なんです。学校の先生がこれを見て考えているんです。我々は何を子ども達に教えていけば子ども達が生きていけるのか、もう分からないんですよ。学校に行って知識を学ぶ時代は終わったということなんです。では何を僕らは考えればいいのか？学校ってコミュニティなんですよ。そこで何を学ぶか。我々は何を伝えるべきか。経験、考え方、理念、生き方。

小中のアントレプレナーが出る時代、しかも東京じゃないんですよ。だから、青森からもきつと出てきます。瞬間的に世の中の情報とつながれるようになったんです。今までは情報を遮断して学校の中だけで情報を出していたから、ゆっくりしか成長しなかったんです。脳の可能性はすごいですよ。もっと早く情報にリーチできれば、後は経験の勝負になります。そういう時代が来ています。

僕には夢がある。やっぱり全ての人々が研究を愛してくれて、人類の英知なんですよ、研究って。これを平等に使いこなしましょうよと。使いこなせれば、皆、豊かになれるんですよ。僕らが歩んできた問題点、解決してきた課題を、これから平等に人類の知恵として渡すべきなんですよ。

どうやって新しい活動をすればいいのか。PDCAサイクルって20世紀は大事だったんですよ。でも、今はもう何が起こるか分からない。PDCAサイクルはダメなんだということが21世紀の学者の間では言われている。それに替わるものって何なのか、という議論をした時に、僕らはこのサイクルを考えました。皆さんも自分の強みとか会社の強みをまず200個ぐらい

挙げてください。俺はこれが強いんだと想い続けることです。そして、その強みを組み合わせてください。そこには何かに使える知恵の部品があります。その知識を組み合わせる考え方を製造する。これを僕らは知識製造業と呼んでいます。自ら知識を集める、自分達で組み合わせる新しい考え方を生み出して自ら実装します。なぜできるか。強みだからですよ。前向きになったら絶対にできるんです。正解はありません。なぜかという、組合せのパターンだけやり方があるから。前例はありません、マニュアルはありません。イノベーションを起こすって難しくない。自分の強みと同じやつらの強みが重なった瞬間、世界でここにしかないって自信を持ってやる。前例があるからやるんじゃない。今、目の前にやれるって言っているやつがいるからやるというふうに発想を変えるべきなんです。調べない。

20世紀と21世紀は仕事という考え方が変わったよということも皆さん、持ち帰ってください。20世紀は事に仕える。ある仕事に従事するという意味なんです。でも21世紀は無いんです。富士フィルムなんか分かりやすいですね、フィルムが無くなっちゃったじゃないですか。従事するものがないんですよ。21世紀は事を仕掛ける、これが仕事なんです。未来を仕掛けていくことこそが仕事になった21世紀と20世紀は違うんです。考えることをしないただの作業は仕事ではないというのがうちの位置づけです。こういうのをちゃんと定義しなければいけない。昨日段ボール詰めをしていました。「俺はこれで未来を仕掛けているんだ。」と言えたら仕事です。「この作業、面倒くさくて。でもしょうがないですよ、仕事だから。」これはダメ、仕事じゃないです。言われたからやっているんじゃない。この作業が未来の何を仕掛けているか、未来の何を变えていくのか、これを考えることが仕事なんです。どんどんそういう感覚を変えていかなきゃいけない。

これからは感性というのが1つのビジネスキーワードになります。皆がちょっといいと思うと、これがビジネスになるんですね。そこに仕組みはない、前例はない、計画もない。仕組みの上に感性は絶対乗っからないです。一人ひとりの感性を大切に、それがたまたま形になったら、こんな仕組みになった、でいいじゃないですか。僕らはこのサイクルです。全てはQPMIサイクル。クエスチョンが最も大事です。全ての物事を疑問に思う力ですね。それは何なのか。パッション、情熱を持った人がこの大きなクエスチョンを掲げるところから全てが始まります。イノベーションを起こそうなんて言っちゃいけないんですよ。問題を解決したいのはありますよ。だけど、イノベーションを起こしたいんじゃないんです。そこを間違えるんです。だから、僕はQPMIサイクルの本質を理解すれば、政治だろうが教育だろうが起業だろうが世界だろ

うが、変わります。これだけなんです。どれだけ考えるか。リバネスってすごいんですよ。そういうパッションを持って、クエスチョンを持った人間を集めている会社なだけなんです。やりたいことを、やりたい人と、やりたいようにやる。そうしたら、イノベーションを興せる会社として最近いろんなところで話してくれと。別に僕は話をするのは嫌いじゃないです。でも、話で終わるのは嫌いです。なので、この中で一緒にやりたい人がいたら一緒にやりたいんです。僕は講義をしにきたのではなくて、仲間を集めに来たと思ってください。いつでもウエルカムです。

(塾生)

仲間を探す際のポイントがあれば教えていただければと思います。

(丸講師)

どこを探すかということが一番重要で、同じ分野で探してちゃいけないんですよ。全く自分の仕事と関係ないところに行って探す、その行動こそがイノベーションじゃないですか。日本人は同じようなコミュニティにどっぷり漬かって探しているんですよ。

(塾生)

頭の中ではこういうことをやったら面白いんじゃないかなというのがいくらでも出てくるんですけど、それを形にできないんですけれども。

(丸講師)

思いついたら何をするか。紙と鉛筆ですよ。皆、すぐパソコンで調べちゃうでしょう。太古の昔からパソコンなんか無いんだから。こんなので人の脳みそが活性化することはないんですよ。自分を信じて書いた紙は、すごい自信のあるものなんです。それが図にできなければ負けです。図に出来たら、多分そのアイデアは実現します。紙に書けないアイデアはアイデアではない、思いつきというんです。紙に書けるアイデアまで落としてみてください。

(塾長)

ありがとうございました。

□グループディスカッション

テーマ:「あおもりを元気にしていくために、私たちが挑戦したいこと、それは何か。」

